

科学における不知

石田知子 (Tomoko Ishida)

所属 富山県立大学

従来、哲学において不知 (ignorance) は必ずしも重視されてこなかった。それは単に「何かについての知識を持たない」状態であり、哲学的な重要性はあまりないと考えられていたように見える。しかしながら、近年では、特にフェミニスト科学哲学や人種をめぐる哲学において、不知は重要な話題の一つになってきた。そこでは、女性であるということの認識論的な含意や、社会において支配的な集団に特徴的な認知的欠陥などが分析されている (Alcoff 2007)。また、歴史学や社会学においても、不知のあり方が政治や文化の影響などを強く受けていることが指摘されている (Proctor 2008, Gross and McGoey 2015)。それらを扱う学問は不知の社会学 (sociology of ignorance) あるいは無知学 (agnotology) と呼ばれ、様々な具体例から社会における不知のありかたが批判的に検討されている。これらの研究における不知のあり方や原因は必ずしも一様ではないが、何らかの原因で特定の事項が特定の人や共同体にとって学びにくい状態になっているという点において共通している。また、多くの場合において、そのような状態は望ましくないものとして批判されている。

一方で、不知の生産的な側面を強調する論者もいる。例えば、科学は未だ知られていない事項を知識に変える営みであるため、生産的な研究を行うためにも、不知を認知的な原動力とすべきだという指摘がある (Firestein 2012)。

それでは、フェミニスト科学哲学などによって指摘された、認識論的な批判を伴う不知のあり方と、不知の生産的な側面は、どのような関係になっているのか。それを解き明かす鍵は、科学における理論や仮説と不知の関係にある。なぜなら、不知に関する議論は、トマス・クーンの科学観などに萌芽的に見て取ることができるが、少なくとも科学哲学の文脈においては、何かを「知らない」という状態はあまり注目されず、十分に検討されてきたとは言い難いからだ。その側面はむしろ、科学技術社会論や科学社会学の興隆の一因となり、知識が偏在するという指摘 (例えば、専門知に対するローカルナレッジの重要性) など、不知の社会学とも関連の深い指摘を生む土壌を形成してきたように見える。よって、改めて哲学的な観点から、理論や仮説と不知の関係を検討することが求められていると言えるだろう。本発表では、まず不知概念を整理し、その後、不知と理論や仮説の関係について分析する。

参考文献

Alcoff, L. M. (2007) "Epistemologies of Ignorance: Three Types." In Sullivan, S. and Tuana, N. *Race and Epistemologies of Ignorance*, SUNY Press.

Firestein, S. (2012) *Ignorance: How It Drives Science*, Oxford University Press.

(邦訳 ファインスタイン 『イグノランス』、佐倉統・小田文子 訳、東京化学

同人)

Gross, M. and McGoey, L. (2015) *Routledge International Handbook of Ignorance Studies*, Taylor and Francis.

Kassar, N. E. (2018) "What Ignorance Really Is. Examining the Foundations of Epistemology of Ignorance." *Social Epistemology* 32(5), pp. 300-310.

Proctor, R. N. (2008) "A Missing Term to Describe the Cultural Production of Ignorance (and Its Study)." In Proctor, R. N. and Schiebinger, L. *Agnotology: Making and Unmaking of Ignorance*, Stanford University Press